

萩薄内證話

泉鏡花作

—

「舞は御覽なすつたつて、そりや構はない事よ。」
お妻は端然として言つた。

「土蜘蛛だつて、八島だつて可うござんす、けれど、見るやうにして御覽なさい。見たくでもない眞似をして、貴方、をかしいぢやありませんか。」

「へい、」と故とらしくお辭儀をする、其の頭の掉工合が、べつかつこのやうに見える、波崎俊吉は最う酒がまはつて居た。

「御覽なさいな。」
お妻は傍に居る十三四の、餘所だと雛妓と云つた處の、稚兒鬘に結つた振袖を、張のある瞳で見返りながら、

「へい だつて。第一、返事が可厭だね。諾とか、應とか言ふものよ。貴方も大學の先生ぢやありませんか。」

「何う仕りまして、生徒がほんの卵の黄味をかへしました、青いのでございます。見るやうに見ると云ふ、御意の處は、成程至極御尤でございます。」
と瘦せた肩を聳かして、正的にお妻の、艶にして些と寂しい、淡雪のやうな顔を見て、

「仰せまでもありません。が、見るやうにして見ようとするには、踊一番大枚の十五圓。殊に唯今の土蜘蛛なんぞ、細工ものには手が掛りますから、二割増か三割増。」

「可厭あな。」 と光子と言ふ、其の稚兒鬢が莞爾。

俊吉が最一倍腕を張つて、
「肝心な事です、可厭ぢや濟まない。二兩二分處、お仕着の此の御料理で、懷中勘定をしながら、御酒

を頂戴に及ばうと言ふ身分ぢや、踊を（見るやうに）しちや見られませんが、お歌所の御意ぢやあるがね。」

紹の縞小紋に、結雁金の三紋着、蘆に鷺草の裾模様、白と銀で露芝の玉の襟、色の中にも品の可い、お妻は水の垂りさうな鬘で居るが、誰も蒔繪の硯箱で短冊を持つとは思はぬ。――なにがし公園の緑の中なる此の翠明樓の客待遇二に組ある一方を舞君、踊子と言ふのに對して、三味線太鼓、下かたの鼓も笛もおしなべて、地方、唄方と云ふのである。――お妻は長唄で勤めて居た。酔つた景氣の俊吉は、お歌所なぞ、と云つたものゝ、やがて此の美女の身を思へば、うたかたの、かなの響きも、もの寂しい。

婦は俯目に聞いて居た。が、思の籠る目の色して、黙つて俊吉の猪口を取る、と、月で知らせて振袖の稚兒鬘に、一つ酌せて一口飲いて、

「波崎さん。」

「え。」
更まつて呼ばれたので、俊吉は吃驚したやうな聲を出す。

「誰も貴方に、」

あとを一息に又飲んで、

「何時、貴方に、お金子を使へと言ひました。」

「勿論ですとも。當御殿相當な事をして顔を出せ

と言はれたんぢや。――何しろ大手門に自身番、

請願巡査の派出所が有らうと言ふ式臺へは入られません。」

「今日はね、姉さん。」

稚兒鬚の光子が、可愛く紅の光る唇を開き、

「門からね、眞直に玄關へ入つて 來ら

しつたつて お縫さんが、あの、然う言つ

て、嬉しがつて居ましたよ。」

お汁粉一膳欲しいと言ふ、物甘えた聲で言つた。――

お縫は仲好、お妻とは同部屋の相仕の妹、内では

師匠株の踊子で。――いま向の廣間で、土蜘蛛を

舞^まふが其^{それ}である。

「今日も見て居たかい。」
俊吉は光子に言つた。

「えゝ。」

と、ませた状に打頷く。

「だつて、晩方、私が入つた時、お縫さん、玄關にや見えなかつたぜ。」

「あの、それはね、あの、貴方が植込の隅の方を廻つて入らつしやると、何だか、肩身が狭くつてゞもおいでなさるやうで、姉さんの幅が利かない。第一、あの江戸兒黨が京の組に對しても。」
「——と言ふ、樓には綺麗どころの京女が少くない。數は寧ろ東京より多いので、豫て紅の襖を争ひ、紫の襟を戦はず。」

お妻は飲みさした疊の猪口を、俯向いて見ながら、透通るやうな薄い膝を、無意識に指で弾いて、拍子舞の地を、指白くちら／＼と移して居た、ふと、其の眦を稚兒鬚に返して、

「何だねえ、高慢な。」

「えゝ、ですけれども、ほゝゝゝ、あの、お縫さんが（約束だから、自分でお玄關に見張つて居れば、過日は眞直に入つておいでなすつたけれども、あの然うでない、又隅つ子を行らつしやりやしないか）つて、先刻は、あのお帳場の傍の小座敷へ隠れて、植込から覗いて居たんですつて――お電話が掛つて、あの、大抵入らつしやる時間が分つて居るんですから。」と、せい／＼息を繼ぐ。

「人が悪いわ。ね、お縫の奴。」と眉を顰めたのが婀娜に見えて、微笑みながら猪口を獻した。其の手で酌をうけながら、

「冥加至極、此奴を願はうばかりが、大抵樂ぢやありませんな！」

「知らない。」と衣の音、幽に肱を摺らした肩が、屏風から半ば漏れて、疊廊下を間に隔てた、其の廣室の蜘蛛の曲に何となく打傾く。

表二階の此は茶の室で、座敷々々へ給仕の煎茶を、
婦たちの汲む處。――長廊下の通に一寸入つて、
息抜をしようと言ふ内證の部屋だから、夏だと言ふ
のに、二枚折金地の繪屏風で圍つてある。直ぐ其の
屏風の外には、銘を一の谷と言ひさうな、青葉若葉
に横笛を蒔繪した刳抜きの丸火鉢に、茶釜の音。松
風と聞けば涼しさうだけれども、無官大夫の客に取
つては、あつ盛と身に響く。お剩に背後の戸棚の前
に、其處等へ配る客蒲團が積んである。が、宵勤定
にもまだ時刻が早い、それ然り、而して
後の故に、行燈部屋や夜具棚へ引下つた次第ではな
い、此は少くとも二階へ上つては居るのである。

實は夕暮から、二組三組、顔も幅も利く臨時の客
が立籠んだために、お妻が氣を揉んだけれども、此
の顔も幅も利かない男を達引いて納める座敷が他に
無かつた。――勿論、俊吉の方は晝の内に電話
で打合せがしてあつた。自働と名づける四民平等な
掘立小屋で、此へ掛ると餘り圖のよくない鳴子を引
く形に成る奴。で、チリチリンと番號を
呼出すのが、悪くすると、御大客で呼べません。

「―― 取次の奥家老に横外頬を拂かれる。が、今日なぞは出来がよく、お中臈お妻の聲が直ぐ受けた。」

「近い？ ー 遠いかい？ ー」

唯、婦の方は帳場傍の電話室から、硝子越に、壁へ貼つた客うけの日取を一度念のために覗いて、次に京都で然るやむごとなき御殿へ御奉公申上げたと言ふ、色白で顔の光る、ギリりと眼鏡を掛けた横肥りの老女、即ち總取締の顔色を窺つた上で、餘り忙しくもなし、がらりと暇でもなし、可い加減に座敷と身體の繰廻しが着くと、

「はあ、近いの。」と、判然言ふ。

「首尾が悪いと、

「遠いよ。」

と、引張つて勢のない聲を出す。

「都合は着かない。」

「だつて、遠いんですもの。」と聲までが遠くなる。即ちおチヤンだ。否、おチヤンも禁句。逢へる逢へないを此の暗號、時々裏の森、横手の坂で、

逢曳の符牒にも用ふるに至つては、時節がらも辨へず、近いだの遠いだの、戀路と火事を一所にした是非に及ばぬ徒である。――今日は其の首尾が（近い）のであつたのに、屏風の裡で蒲團を背負つては、成程、樂ではありませんまい。

俊吉は、うまさうに呷と受けて、

「そりや、其方は御存じぢやあるまいけれど、なか／＼何うして、御門内の自身番と向合ひに、自動車だ、二頭立だ、お抱車だ。植込を透かした大式臺には、三ツ指で八九人、上品事にづらりと控へた大手へ立つて、一つ見込んでごらんなさいなさい。

あの又敷詰めた小砂利が悪く安下駄の齒に引掛るからね、歩行のぶらりで乗切るのにや、餘程の度胸が要ります。此奴をお縫さんが、あゝだの恚うだの、や、帽子が仰向き過ぎた事の、杖の持やうが曲つた事の、肩を怒らしちや書生ツぽいなんて、一々お手のものゝ振つけで、式臺から絲を引張るんだから堪りません。何の事はない、此方は面くらつた凧と言ふんだ、然も奴凧だね、あゝ、ふら／＼ふら／＼。

斜違ひにお妻を見て、

「お剩に先刻なんざ、摺違ひに、杉丸が、自動車
で横づけとおいでなすつた。瞳若たらざるを得ませ
んや。」

其の杉丸と云ふは、品川あたり御殿山の御前と稱
へる、洋行がへりの男爵で、しば／＼お妻に通はせ
給ひ、悪口説きに口説かせ給ふ

如何にも波崎はひるんだらう。それ／＼の首尾、算段で、彼が借家の、麻布笄町から電車であて、飯倉の辻をうろついて居る時分に、男が御殿山を乗出しても、疾き事稲妻の如き乗ものは、翠明樓の大手では、晃々と、摺違ひに成つて、光り輝いて先へ入る。――

「其時義經少も騒がず、眞直ぐに乗切つたんだ。宇治川よりか難しいんです。あゝ、源太景季ぢやないけれど、梅ヶ枝の手水鉢でも見着からないかな。」と差出す猪口、今度は稚兒鬻の手でうけて、波崎は吻と息した。

お妻は故と知らない振で横を見た。が、膝の手ばかり、遣瀬なさを紛らすやうに、三味線の調子も丁ど早間に刻む、と其處へ、一人、十七八の島田鬻なのが急足に來て差覗いた。

「お妻さん。」

「あゝ。」と屏風から、襟脚白う、さしのべて、半ば其方へ顔を出す。脊筋を反らして、逆に裾についた指が、其の鷺草より蘆に白い。

「一寸、新座敷で。」

「はあ、だつて、今しがた一座敷、舞臺の間で、地を濟まして来たばかりぢやありませんか。」

踊は別に最う一組あつたと見える。

「ですけれども。」と困つたやうに、敷居極で聲を密める。

「お濱さん、入り給へ。」と波崎が裡から呼んだ。

「はあ、波さんですか、後ほど——ねえ、お妻さん姉さん。」

「今、直ぐに行くことよ。」と、俯向いて向きかはる。

「ね、何うぞ——波さん。」

「何だ。」

「酔つちや可厭よ。」と、はら／＼聲音、やが

て階子段をトン／＼下る。

「男爵だらう、御催促。」

と膳はづれに波崎の乗出す胸を、押戻すやうなお妻の聾。

「誰でも可うござんす。――一寸行つて來ま

すから。貴方酔つてまた、梅ヶ枝の手水鉢なんか唄つちや可厭ですよ。」

「唄なんか酒は飲むがね。」

手酌で引寄せる銚子を押へて、

「光ちゃん、熱いのを――あとで唄つたら抓つて頂戴。」

お稚兒が笑つて、人形のやうに座を立つと、羅の

お妻の裳が、疊をするりと屏風へ入つて、
「可くつて、波さん。」

「大丈夫、大丈夫梅ヶ枝は遣りませんがね、うま
く三味線が生捉れたら、東雲のストライキ。」

「以ての外です、相成りません。」

と今度は優しく莞爾して、横から撓やかに肩を寄せ、顔を並べた身動きに、袂が觸つて萩がそよぐ、唯屏風の繪を見て、颯と瞳に色を染めた。

屏風の繪を紹介する

白玉か何ぞと人の

問ひし時

背に、やは／＼とおもみの掛つ

た、芥川の月の露の御兩人である。

「一寸、」

「お江戸日本橋七つ立ちは？」

「不可いよ、今夜は。」

と、繪の月に影を映して、空色地の結雁金が、衝と草の中を外に出た。が、敷居際で立留つて、

「あ、御覽なさいー 丁どお縫さんが蜘蛛の
糸を
と、呼吸を忙いで低聲で呼ぶ。」

波崎は急いで出て、お妻の袖を緑に掛けた、松の

風情で並んで立ち、

「何だい、――見るやうにしくつちや見ては不可い、と云ふ癖に。」

「此なら可いのよ――先刻、何です、向うの襖へ附着いて、投出した膝頭へ組手を突反らしたりなんか、風采が悪いつちやないんだから。」

「だつてお縫さんが、退屈だらうから見ると云つた。」

「誰が、あんな風采をなさいつて申しました。」

「何うせ折助仲間さね、御前のやうに

は参りませんよ。」

股をふつり――「痛い。」

恚う青疊を舞臺に取つて、四邊を拂つた。燕子花の紫に、薄い虹のさしたやうな傾城姿のお縫の面影。唯見ると、蜘蛛の精の凄さは無しに、何うやら美しく微笑んだらしいのが、拍子を蹈んで、蹴返す襖、燃立つ裳は、火を散らし、捌く黒髪は煙を流し、ふ

と此の二人を狙つたらしい、横に走る瀧の如く、敷
居越に絲を飛ばした。再び千筋を空へ投げたが、天
井へ雲を浴びせ、むら／＼と纏れ掛つて、花電燈の
光を包むだ傾城の其影とゞもに、廊下も霞んだお妻
の姿。紹の友染の蹴出襪、鷺草に水を映し、廊下を
弱く、疊摺れに、すら／＼と段階子を、圓鬚の俯向
いた肩細く、雪のやうな頸が消えた。

四

「大出来、大出来。」

紫扮装、錦の帯、衣装のまゝで、金屏風を差覗いで、お縫の遊君が莞爾する。

「いや、大出来。」と受けて言ひつゝ、撞木町にも蜘蛛の精にも、まる顔の愛嬌に、凄さは少い。第一、踊つた口で、（大出来） なんと氣のさくい、そして豊艶した娘風俗の婦だから、と彼は心に思つたが、實は讚めたのは其ではなかつた。

「何だ、其の事か。」

お縫が遠見を掛けて見張つた、と云ふ、波崎が門を、あの入つて來工合を讚めたのであつた。

廣間には、一齋に起つた拍手のあとを、高笑やら大談話、哄と賑ふ聲が揚る。其の拍子の音に連れて、踊の一組は地方と共に、静々と廊下を引いて、一先づ、足溜りに此の茶室へ入つたので。

頼光も獨武者も、それは京組。馴染が無いから、大口の後姿、太刀をすらりと其のまゝ出で行く、三味線を杖に、ト撥を帯際に取った連中も續いて出る。中の一人の、赭ら顔で肥満した毛の薄い中婆さんが、出掛けに屏風を摺れ／＼に、お縫の衽襦から、じろりと額越の流眄を與れて、

「入らつしやい。」

「やあ、今晚は。」

「直次郎と云ふ形でございますね　――　遊女は働きものだ。」　と、ずいと出る。

お縫が、黒目勝なのを、ぢつと其の中婆さんの背後へ浴びせて、

「三千歳が違ひますとさ。」

「遣手め、ちよつ。」　と舌打して、單衣の膝を、ぐいと搔つて、波崎が胡坐を直した。

お縫が傾いた頬に手を當て、屏風に丁と肩を持たして、

「もし」

「うむ。」

「直さんえ。」

「あやまつた！」

「此處は二階だから大丈夫よ。帳場へも部屋へも匂はないから、内證でしやも鍋を煮るたつて屏風で劃らなくつても可いんだわ。お妻さんが遠慮深いから。」

「まさか、此の陽氣に、ぐつ／＼煮られやしないぢやないか。」

「まあ――そして又何にも食らないやうね、毒よ、御酒ばかり飲んでちや。」

「何分、胸が充満でね。」

「お互様。」

「おや、此畜生。今戸の事だな。」

お縫は今戸に、ぞツこんと云ふ俳優がある。

「其の通り！」と、ニヤリと澄ます。

「打つよ。」

お縫はひらりと飛退きながら、崩れるやうに、錦の帯に手を支いて、

「は、何うぞ性根の附きますやうに。」

忽ち、波崎が立ちかゝると、胸を反らした、お輕と言ふ身で、白やかな手で支へながら、

「御免、身體は自分のものだから構はないけれど、衣裳は御主人持ちだから、聊か事が面倒なの。第一暑い、何のツて。」と、思ひ出したやうに、はら／＼と袖で煽ぐ。

「氣だけは確だ。」

「心此處にあらず。」と言ふ。

「それだから。」

「あゝ御免なさい、着換へてすぐ来る。」と襟を扱くと、裨襠を刎ねた、素足の雪に緋縮緬。

波崎が、膳越に一寸極つて、

「おいらん、お召替へ。」

と膝に手をついて熟と視る。

「可厭だ。ろくな眞似はしやあしない、又姉さん

に叱られますよ。」

「一度もう叱られたんだ。」

「打ちますよ。」

「何うぞ性根の着きますやうに。」

五

彼は獨で手酌した。

「あゝ、性根が着けたい。」

が、お縫にくらはされたくらゐでは、着きさうも無い性根だ、と一人で苦笑する下から、猪口を持つ手がふら／＼と成つて、おのづから左右へふらつく頭は、自身に扨我ながら頭を掉つて居るに齊しい。

時に、お銚子を捧げて参つた、振袖の光子さへ、いまの、あの踊の組が、唄ながら藻汐草、疊の波を引汐に、其の撫子も、渚を誘はれて出たのであつた。

誰も居ない、と成ると、金屏風の其の芥川の繪が――また此の繪姿が、やがて中背の人だけぐらゐ、萩も尾花も色に出て、狩衣の袖、袴の裾、色彩、匂、筆ながら、昔を今に活けるが如く胡粉滑らかなる膚の緻質、二條の御方の面影は、夕顔の雪の花、斜めに月をうけて浮出るばかり。

に照榮えて、紅の霧をかけたやうな熱爛の酔に爛れなむとする波崎の瞳に映るのが、――ほんのり

と瞼を染めて、業平に頬を合せたのを、客に恥ひ給ふ風情に見えつゝ、
ついで此處に居たお妻の色香に
戀路は露も玉である。

唯、被衣よりも、ふうはりと、練衣よりも乳の柔かな、御胸を、脊にひた／＼と負ひ參らせて、伸上るやうに振向いた在原の中將の、麗に豊なる頬に、露の重さにうなだれた如く、唯なよ／＼と成つて、高子が顔を重ねておはす。然れば黛は絲萩の葉よりも優しく、そして、御目ざし恍惚として、中將の鐵漿艶やかな唇に、自然に寄つた口許が、珊瑚の濡れた紅である。

とばかりでは何も仔細はない。

が、安からぬ。

「今頃は奥の新座敷で

其の中將の顔容が、色の白さから、頬の圓さ、頤の二重にふつくりした處、ちよぼりとある髭の形まで、指貫も烏帽子も丸く、苗字までが圓い、杉丸男爵に肖て居てならない。

「惱ませやあがる、チヨツ。」
「自棄に盃を力チリと落して、波崎は傳法らしく扱
くやうに肩を振つた。」

「何を持つて行つて打附つても、身上を較べられ
ると、此方は野末の薄の蔭へ、追手に出る列卒なん
だ。やくと言ふにも縁のある、松明がりの一人で
すぜ。精々體裁をよく言つた處で、北面の武士だ
よ。」

波崎は怯やかされたやうに、ふと透かして窓を見
た。

「暗夜だなあ。」
「――ぐつたりして、其處に
積んだ蒲團の傍の、一間の壁に脊を凭す、――
床も柱も何にもない。」

また道行の繪を見るにつけ、向うの廣間――
踊を見たのは外國人が一座した――飛んで小座
敷、棟を分けて庭を隔てた、遙か彼方の大廣間、其
の總二階、下座敷の彼方も此方も、酒に城を造り、

三味線みせんに市いちをなす。其賑そのにぎやかな人聲ひとこゑが、一つひとつに成なつて哄どっと寄よせて、道行みちゆきの追手おつてに聞きこえる、かと思おもへば、拍子ひやつしが跫音あしおとに驚おどろいたり、高調子たかてつしな女をんなの笑わらひが、夜烏よがらすに紛まぎれたり、時鳥ほととぎすに聞きこえたりする。

まではまだ可よかつた、が、頭あたまは赫くわつと胸むねは冷つめたく、ふらりと首低うなだれて胸むねに手てを置おくと、何どうやら業平なりひらを追おつ掛かけるのでなく、壁かへの隅すみに、鮫鯨あんかうの紐ひもを啖くらふ體ていに、一人ひとり胡坐あぐら搔かいて手酌てじやくで呷あふつてる邪魔じやまものを、歸かへれ、と追捲おひまくるが如ごとくである。

「まさかに

お妻つまだけは、と末練みれんが前さきへ、身勝手みがってが後あとを衝つく。

——口惜くきしいにも、心細こころほそいにも、寂さびいにも、對手あひての男おとこが在ざい五ごの君きみで、お妻つまが寢返ねがへつたのならば尚まだしも斷念あきらめられる。が、此この繪ゑを逆さかに視みれば、負おんぶをしたのも手籠てしめである。かよわい婦をんなが恚かう成なつては、眉まゆさへ、目めさへ、唇くちびるさへ、身みをまかせずには免のがれられまい。

聞きくが如ごとくんば男爵だんしやくは、金力きんりよくと権勢けんせいとで、少すくなか

らず暴威を振ふ。

――廊下で行違ひに足からすくつて、仰向けに彼女を倒した。後手に捻上げといて、鉛の酒を口に注いだ。

然う言つて、お妻は泣いた。

いつぞやの首尾の折からであつた。

爾時冷たい黒髪が、涙に濡れて氷のやうに、冷々と胸へ――と思ふと、あれ、繪の萩が、そよりと戦いで、葉末の露が、はら／＼と頬へかゝる。胸の動悸が、キリ／＼、と妻戀ふ蟲の音に響く。

眉より、目より、唇より、白々とある頬を掛けて、背に負はれつゝ、丈よりも長く漆をたゞんで月の霏に解いて流した繪の黒髪が、あの唇と共に來て、ぬれ／＼と頬に觸れた。

慄然とする。

背一ツ、丁とたゞいて、

「兄さん睡つたの？」

「や、お縫さんか。」

楠奇にハツと目をニる、と朦朧と酔つてる目には、霧の裡なる草の花、紺地に秋の裾模様、胡蝶の飛模様、紅入友染立しぼの長襦袢に着替へて居て、

「目が覺めて？ まあ、寂しかったでせう。」
と、身を寄せて、肩を抱へるやうにして言つた。

波崎は抱起された、と云ふ形で、

「うと／＼遣つたか、串戯ぢやない。最うそんな時間かね、濟まなかつた。」

と慌てゝ氣抜けのしたやうな、うつかりした其の顔を視て、

「起して上げれば、すぐに歸らねば成らないやうに、兄さん、貴方、そんなに氣を揉んで在らつしやる？ お歸りに成らなければ、此樓へ悪い

やうな時間まで貴方を一人で置きますかッて

姉さんと私が附いてるぢやありませんか。立派なお客様で居て、そんなに何も遠慮をなさるツて事

はない。けちだ、しみつたれだつて御自分で卑下を
なさるけれど、どんなに幅を利かしたつて、人間で
すもの、貴方、兄さん、樓一杯に擴がれますか、鯨
や象になれますか。それだのに氣で氣をお打ちなさ
るから瘦ぎすな兄さんが弱さうで尚ほ寂しい。姉さ
んも氣を揉んでます。――眞個に私たちに力があ
つたら、それこそ樓を買切にして、手車で、天井ま
で昇いで遊ばして上げたいけれど、奉公してる身體
だから、効性がなくなつて口惜いよ
も、時節を待つ氣で、ね、堪忍をなさいまし。姉さ
んも心配ばかり、私だつて心細い、
の兄さんのやうに思ふんでもの。」
と、目に一杯、露のつたふを保ちあへず、片袖を
衝と當てる。

「何にも言はない、お縫さん、唯酒だ。」と居
直つた。濡れた頬を拂つたのが、冷いお妻の黒髪を
手で押のける思がした。

「時間は？」

「九時よ、まだ私が行つて、二十分と經ちません。
顔を直すと手間取るから、眉毛も鼻も拭いたばかり

で
來^き
た
ん
だ
わ。
┌

六

「お縫さん、」

彼は更めて一獻して、しんみりした。

「働の無い、こんな野郎に然う言はれちや・お前さんも迷惑だらうが、眞個他人とは思はない

がね、兄妹とは言はないでも、恚うして、附合つてくれるばかりに、樓の方には遠慮をし、朋輩たちにや肩身を狭くすると思ふと、あゝ、氣の毒が通越して、面目次第もないのだよ。」――思ふ婦の妹分に面目のない男は、麻布笄町の我家に留守する、細君を何とする。――お縫は微笑んで紛らすやうに、

「結構、兄さんの爲の氣兼遠慮で、肩身を細くすれば本望よ。私、瘦せたいわ。」

お妻さんが羨しい。「と、肩から胸を抜いて言つた。」

「あれぢや、衣服きものに、手足てあしがついて居ゐるばツかり
です。」

「奥おくさんは？」 些ちと唐突だしぬけらしく訊きいた時とき、お縫ぬい
のぱつちりした伶俐りこうな瞳ひとみがちらりと動うごく。

「知らなかつたつけかな。」

「え？」

問返とひかへして、お縫ぬいは驚おどろいた顔かほをしたが、

「何時いっ私わたし、何處どこで、奥おくさん

にお目めに懸かつて

「成程なるほど、――私わたしは酔よつてるな　――一つ背せなか中

を打ぶつておくれ。」

まあ、其その杯さかづきをくれたまへ。」

「私わたし、手ての方ほうを進あげませう、打ぶつのにさ

「

「いや、背せなか中ちゆうを打ぶたれたくらゐぢや、なか／＼性しや
根うねが附つかないんだよ。」 と、我身わがみを持餘もてあまして弱よわつ
たらしく、頹然くつたりと成なる。

「情なさけないねえ、ほ／＼／＼ほ／＼。」

「何、串戯ぢやない。」
酔に曇つた目を二つて。

「何も彼も唯最う面目ないに就けて、お縫さんに
言譯がある。ね、言譯も可訝しい、恚う言つちや、
人情に故事來歴、因縁があるやうで變だけれどね。」

遊ばしてくれるお前さんたちの肩身を狭
くしてまで、金錢の晴の場所へ、影法師見たいに迷
つて來るのも、洒落や榮耀ぢやないんだよ。――
無いだけに、尚ほ悪いかも知れない。が、私はね、
お前さんたち二人が宿命の星のやうに思はれて成ら
ないんだ。
所に、一つ離れても生効の無いやうに思ふんだ。」

と言ふ　――　難儀な男が、また細君を何と思
ふ。――

「此の柄で、此の薄べらな懷中で、そ
んな事を云つて氣味を悪がつちや不可い。」――
お妻にも、實はまだ打明けられない事なんだが　――
彼は此處で言足して

「第一ね、二人の中で、私をはじめて、聲を聞いたのはお縫さんだった。」
波崎は言った。

「然うでしたつけ お喋舌だわね。」

「否、お喋舌も何もない。變な男が跡を追けて、お縫さんは氣味が悪かつたに違ひない。道理だ。」

「――談話が飛ぶが、一體去年の、あの日は、或新聞社の催しで、美人が二人、變装して、此の公園へ姿を顯す、花の精、花の女だ。此を見附けたものには懸賞を出す、と言ふので、人氣が湧いて、可恐しく人の出た日だった。」

お前さんは、お妻と二人で、今戸へ用達しに出掛
けようとして、三門前で、髭を生した半纏着に引捉
つた。此だ、違ふまい。で、新聞を突付けられ、群
集は十重二十重に取圍むし、弱つたとて、云ふんだ
つけ。」

「はあ。」と頷く。

「無論、主人をごまかして、岡惚の俳優の許へ、
病氣見舞、と云ふ寸法なんだから、其のくらの魔
は魅すだらう。」

「おほきに
處一寸京言葉で行く。」
とお辭儀をして、此

「お酌だ。」

「あい。」

「處が、最う一つ魔が魅した。――今戸の其の歸途に、お前さんはお妻と二人、田圃の大金へ御飯をしに入つたらう。お妻は圓鬚で、お前さんは銀杏返だ。端然として竝んだ姿が、一人で一銚子控へて居た私に、葭戸越に露を打つたやうに涼しく見えた。だけなら何の仔細はない。婦人が二人居たばかりの事だが、其の身體つきと言ひ髪容、風采、恰好、それがね――氣にしちや不可いがね――前世の約束事で、も有りさうに、私がもの心覺えた、七つ、八つ時分から、處を定めず、時も分らず、夢幻に、何處かで時々逢ふ人なんだ。一年に一度か三年に二度、づつと飛んで五年七年十年十年目に偶と見た事もある、餘所の家へ行つてる時、スツと藏から出て戸外へ抜けて、何處の誰とも知れなかつたり、晩方に四辻で擦違ふ、と思ふと見えなくなつたり、一度なんざ、机のうしろの柱の中へ松並木のやうな道がついて、其處を歩行いて居るのを視た、勿論此は夢だらうがね。

谷を越えた山に居たり、然うかと思ふと、岸に近い船に見えたり。何時も二人連で、一人は痩せて、一人は肥つて、肥つた方は心持脊が低い。そして屹と圓鬘と銀杏返で、どんな時にもきちんとして、今、帯をしめて髪も結たてゝ出たと云ふ姿だ。其の姿ばかり。口を利いた事など勿論、目の動いたのを見た事もない。――

あの、大金の時の以前、最近には、やがて七八年めで、豆子から鎌倉へ通る取着の隧道の處で逢つた。午後二時ぐらゐ、光明寺の十夜でね、小春日和の瑠璃のやうな空だつけ。隧道だけ向うに暗い。「其の暗い穴の上に草が掛つて青苔の上をちら／＼火のやうに色の着いた葛が搦んで、龍膽の咲交つたのを、高く蒼空に視ながら近づくと、もう、しと／＼と岨の雫の聞える處で、ふと其の、隧道の山の尾に成る、路傍の丘に、晃々光を持つた薄の穂から、肩が見え、鬘が見えて、竝んで二人居た。――少い方の婦が、擬へるお前さんだ。氣味を悪がつちや不可ないよ

お縫は黙つて聞いた。が、目を睨つて居る。

「それがね、春の陽炎のやうに光つて銀の振出しの箸を、袖のしなひに振出したと思ふと、圓鬚の方が胸に當てゝ居た扇子を疊んだ――それだけ見て、通越して、隧道へ入らうとしたけれど、此は引返さずには居られないぢやないか。しかし、最う消えたらう。何の時も然うだが、果して唯二分の間だに、薄がひら／＼と何う變つたか、今見た影も形も無かつた。」

何時の間にか、銚子を持つて来て、其處に聞いた稚兒鬚が、此の時八ツと立つて廊下へばたばた／＼。

「あゝ、胡蝶が飛ぶ。其の時はね、慄然とすると、薄で鈴蟲の鳴くのが聞えた」

「お光さん。」
「恐いわ。」
と、出足をお縫に呼留められた、

振りそで
振袖は敷居際へ、浮足で密と返る。

「お妻さんは。」

「あの、杉丸の御前が、あの」

「仕様がないな、白天狗。」

男爵は婦人の間に、渾名を白天狗と言ふのである。

「お妻さんが、あの、一寸でも離れて出さうにすると、平時のやうに暴れるのよ。でも、あの今夜は目下や、御家来でないお連様ですから、それほども無いんですけれど、あの、お妻さんが、一度廊下まで出たら、お杯洗を取つて、突立つて、天井から庭の處へ、瀧のやうにドンとぶちまけたのよ。お植さんが吃驚して、また引張つて返つたわ。」

「惜いね。」

波崎は、此を聞きつゝ、立續けて呷つた。そして調子高く、

「構はない／＼、恚う成りやお妻もお縫さんも見

境^{かひ}がないのだ、――
驚^{おどろ}くな。否^{いえ}ね、此^この話^{はなし}をす
るのにや、彼^あ女^れの居^ゐない方^{はう}が可^いいんだよ。」

「――浅草でお縫さんが銀煙管を筒から抜く
 圓鬚に結つたお妻が、扇子を疊むのが葎
 簀越に見えた時は、山が海にや成らないけれど、大
 金の、あの池へ波が立つやうに音がした。」

「俄雨が降出したんだね。お前さんたちの方で、縁
 側の戸を閉めた。」

例に因つて、最う其切、消えるやうに私の目から
 見えなく成るんだらう、と思つてると、何うだい、
 勘定を済まして、馴染もないのに貸してくれた番傘
 をさして公園へ歸る途中で、あはしま様の前で、又
 二人に逢つたぢやないか。――お参詣をするや
 うだから、立停まつた。済まないが、あとをつける
 氣だつた。丁ど、自動體量器と云ふ國民衛生の榜示
 杭の立つた處でね。」と苦笑した。

「私たちはね、可厭だ、尻端折で番傘は可いけれ
 ど、體量を計るのは情ない。能登國の人かと思つた

わ
「と、一服吸ふ。」

「しばらく
此處で然う半疊を打込まれ
ちや狼に火繩だ、後が續かない。」

あれから、池のふちを通つて活動小屋のまへを行
くのが、雨の中を、二人だけ、薄色の涼傘で尚ほ目
立つた。
田原町から電車で。これが廣小
路で降りて、丁ど不忍で開會中の、何とか共進會、
とか言ふのへ入つた。

――餘興に踊があつた。相馬の古御所だと思ふ。
大蝦蟆を引抜いて振袖のお姫様が、颯と黒髪を捌い
て印を結ぶ、フツと飛んで來る白矢の征矢を口で銜
へる。花道へ頼光が虎の皮の尻鞆掛けで狩裝束。上
手へ大宅太郎が武者修行で出て、六部姿の將軍太郎
が二重で捕方を兩方へ投げる。と、熊の皮の道服は
山賊の頭領、伊賀壽太郎が太刀を振被つた見得で幕
だつけ。

不思議と銀座まで道が同一
札の辻ゆき
が櫻田門を廻つて飯倉で留る、と又下りたのが三人

一所だ。其處から方角が變つて、お前さんたちは坂を公園へ入らうとする。私は笄町 麻布へ行くので、南と北へ線路を隔てた。糠雨の降る薄月で、路は天の川のやうに見えた。が 袖の香、肩の色にひかされて、鵲の橋ともなしに危く雲を踏む心持で、うか／＼と線路を渡つて、お前さんたちに近いたと思ふと、――其の時だよ、お縫さんが、身體をすぼめて――あら、花の娘ぢやない事よ――と然う云つたんだ。」

「ですわね 三門前で晝間怯かされて居たもんだから 可恐かつたわ。」

「飛んだ獣だ。が堪忍しておくれ。――然う言ふわけで、知己に成つたんだ。二人は水車の心棒で、此方はひとりで、ぐる／＼と獨樂の如くに廻るから、眼も眩まうし、足も蹠踉つく。魂もふら／＼して、水だか空だか、夢中だもの。廻されるんだか、廻るんだか、世界と一所に星が廻る、此奴、夜這星と言ふんだ。」

と、我手に二の腕をぐつと掴んで、ふら／＼として、

「一層の事、消えてなく成ツ了やがれ。」

其處へ

「御挨拶だわね。」

「あれ、姉さん。」

唯、屏風の裏と引合せの、葭戸の間に、三日月が映すやうに、お妻が細く立つて居た。無理酒に蒼白い顔して、鬢の後毛はら／＼と亂れた姿。捌く裳より、金屏風の萩が戦いで、すつと出て、いきなり男の膝を力に、トンと萎れた身をもたす

天狗に掴まれたらう、片褌下りに着崩れして、竹屋町の帯がだらりと落ちた。蹴出しもこぼれて、蒼ざめた死んだ白脛のやうに疊に投げて、一度、男の膝ぐるみ前髪を手首に支いたが、苦しい酔にしとゞ濡れて、酒より雨のびつしより汗。雪の膚を絞りなば、夏菊の露ならむ。

「はッ、」と、呼吸をついて捻起きると、男の

胸むねに衣紋えもんゆるく、鬢びんが頬ほにひやりとした。――お妻つまは茶碗ちやわんを、水貝みづがひの器はちへ、どつとあけて衝つと出だして、

「お酌しやくして頂戴ちやうだい。」

「不可いけないわ。」

「可いいのよう。」

眦まなじりを熟ちつと見据みすゑ、

「此處こゝで一息いきつかないぢや死しん了じまふ！ あ、可厭いだ。」

ぶる／＼と肩かたを震ふるはす

「漸やつと歸かへした。可いい鹽梅あんばいなお連つれがあつて立たつたけれど、玄關げんくわんに突立つゝたつて、ねち／＼して居ゐるから、帽子ぼうしを持もつて、殿様とのさまのお傍そばにさ、御臺所みだいどころのやうに附ついて居ゐた、私わたしあ焦じれつたいから、背後うしろから、伸上のびあがつて、あの頭あたまへ、帽子ぼうしをポーン！」

と、お妻つまは發作ほつさてき的に笑わらつた。晴々はれ／＼しく、

「ほ／＼ほ／＼」

そして、肩かたを搔か込んだ袖そでの下したで、波崎なみざきの手てを引ひ継ぎ

るやうに取^とつて震^{ふる}へて居^ゐた。

九

「お妻——お妻——お妻——」

寂寞とした、翠明樓の、森の中なる、緑の如き電
 燭に、物あり、一個の白天狗。灰色の熊、人立す、
 で、猛然たる形を顯し、苛立つた聲して呼ばはり/
 \、表階子をドドドドと駈上る、と島田が一人、圓
 鬚の一人、慌しく、ついて来る。

あとに續いて、駈上つたのが三人ばかり、欄干に
 立淀むと、疊廊下を來掛るのが二人、おなじく上口
 で立留まつた。

「出る！」

と喚いて、茶室へ、づか／＼と躍込む、と前年洋
 行した時に、巴里で拳闘を學んだ上、コルシカ好み
 と稱へて、豫て衣兜深く、あの、短劍を心得た男爵
 であるから、戀の敵と油斷せず、屏風越に體を固め
 て、覗く、と散かつた膳ばかり。就中お妻が呻つた
 塗椀の、ボンと伏つた形などは御前を閑却したもの

で、失禮千萬である。

「逃げたか。隠したな。」
男爵は室の真中に突立つた。

「――申上げます。御前、二人は逃げたのでも、隠れたのでもござりませぬ。波崎が歸るのを、お妻が送つて出ましたので、唯今頃は、公園の森の中を、手を取つて歩行いて居るのであります。――

「今度は幾日だい。」

「情ない波崎が、いつも歸りがけに小兒が日を數へるやうな事を云ふと、婦が

「都合を見て。まだ分りませんから。」

「厭だ。明日来よう。」

「御隨意に。」

此にてぎやふんさ。階子降りるも悄悄と、婦は後を見送りて――と罰の當つた相方に成るのが、
當夜に限つて酒の勢。

「今度は幾日

」と婦が云つた。

「多日控へる。」

「私を連れて逃げて頂戴　　―　　否、

其處まで送るのよ

」

で、留めても肯かず。

「親が急病と云へばね、一度ぐらゐ、

どんな事でも。」

内々一夜はあけても可し、とお縫が目で知らせて、身にかへて言つた　　―　　で、歸途に門を出て飯倉の坂へ下りる筈を、向う寄の夏木立・式臺の遠灯をうけたれば、探海燈に照された海月と言ふ形で、ふら／＼と逆に歸つて、公園の方へ掛つて暗中で待つと、やがてお妻が、鷺草の稜白く草の露に濡れながら、部屋の潜戸から忍んで出た。

―　　二人は既に杉丸男爵は歸つたものと思つたのである　　―　　

處が御>前だ！

靴まで穿いて、小砂利

へ出て、同伴のばら／＼と歸るのを見濟ます、と自

動車の轍の蔭から一直線に玄關へ引返した。

「爺い。」

「不便や、可加減袷婆氣な、下足番の鼻頭へ突着けて靴を脱がせた。」

「あら、まあ、御前様。」

顔を見合す、新造年増、桔梗、刈萱、女郎花、造屋臺の花野と言ふ、咲重つた式臺を、野分の如く吹亂して、奥べ哄と暴通つて、板廊下をぐる／＼廻りに、奥二階の新座敷、舊の席へなぐれ込んだ。

「入違ひに波崎が樓を出たのである。」

「やあ、此からだぞ。無禮講、裸體で騒げ、南洋踊だ。あツはツはツ。」

と高笑ひの鼻を俯向けに、お妻が被せた、パナマを被たまゝ、脇息に凭掛つた鞍間は快晴仕つて、御機嫌うるはしく見えたりける處に、跡片附の手を留めて、姿を繕ひ、御前に候ふ、美なる艶なる四五人の中に、お妻の居ないのを酔眼に見着けると、愛宕

の方から雲が出た。

「お妻は何うした。」

「唯今参ります。」

「直ぐに」

で、少時侍る。

「丁度此處だつたね、秋あの、薄錦葉の、紅、淺黄、美しい樹の下に、同じ色の、やたら縞のお召の羽織で、蛇目傘を半すぼめにさして立つて居たのは。

錦葉の影が、其の傘を透して顔から襟にまで映つて見えて、日は映さないが、明かつた――あれから何處かへ行く事の、約束を違へず、待つて居てくれたは可いが、急に杉丸が大連で来るので、樓の手まへ、何うしても出られない、と言ふから、怒つたね、我輩。」

お妻は暗さに、黙つて偏に肩を寄せた。唯、木立の中へ颯と一射、遠い電車の光らしいのに、薄り葉蔭に描出されたのが、ふと其の時の、錦葉の中の姿

に見えた。

「其の時、傘なしさ。で、さして居たのを持って歸れツて、言つたつけ。お前の心と同一天氣だ、要るもんか。――が。惜いが振返る、とお前の居たあとに、錦葉の根に、すばまつて、其の蛇目傘が、しよんぼりと濡れて居た。――まだ返しません。――あの傘はね、妙な處へ置いて來て了つたんだぜ、實は」

「お止しなさいよ、詰らない處で、飲むのなん

ぞ。

「忽ちお叱りで恐入るが、然うぢやない。あれから、赤羽橋へ出て、蕎麥へ入つて、自棄に、四本と退治つけてね。」

「そら、御覽なさい、可厭だねえ」、二階へで

も。

「否、腰を掛けて、」

「困るわ。私。」

「忽ちお叱りで恐入るが、身分相應です。第一

「また男爵家のお部屋様は、過ぎものだと言ふんでせう、可うござんす、此から其の蕎麥屋へ行つて、腰を掛けて食べませうよ。」

と取れば、手を取つて、

「忽ちお叱りで恐入るがね、まあ、お聞き。酔つてふら／＼と出ると、一旦留んだのが、又ざつと降出した。處を荷車に――大方註文を届けるのだらう――炭俵を積込んで、新世帯の共稼ぎと云ふのらしい、亭主が曳くと、嫁さんが後おしだ。」

「羨しいねえ。」と、ぐいと手を曳く。

「え、慌てなさんな。處が番傘が一本です。亭主が此をさして、がたくり／＼。女房は、赤い手絡の圓鬘で手拭を被つたばかりで、ハツハツと押して行く、――俺ら納らなく成つた。」

と言ひ掛けて、ふと言を途切らしたのは、ものゝ發奮に言出したが、實は、其の時、彼は我家に苦勞をさせる、留守の細君の事を思つたのであつたから。

お妻は何氣なく、

「で、何うなすつたの？」

「其處でね。何うぞ／＼、――と

低聲で其の女房の弱るらしいのを 此方あ

酒の勢だ、構はない。お前の、あの蛇目傘をさし掛

けて歩行出したのさ 赤羽橋を渡返して公

園へ入つて来た。雨だし、暮掛る 人通り

が途絶えた、と思ふと、何にも言はなかつた亭主が、

バツサリ番傘を窄めるとね、突然振向いて車越しに

其の女房を打つたんだ。妬いたんだぜ。」

「まあ。」

「串戯ぢやない、何が怪しい。其の證據には、可

いか、前へ立つて夫婦が相合傘で楫を引け。俺が後

押をして遣らう。凡そ、色戀の有るものが、亭主と

二人相合傘で車を曳のせて、背から後押をして行か

れるものか。で、それから押しながら説教した、

女房を可愛がれ。」

「波さん。」

「波さん。」

「其の、其の蛇目傘は、車の上へ置いて来たが

ね。

「否、波さん。」

「だから、黙つて居たんだよ、我ながら

狂人染る。お前に逢つてからと云ふも

のは、一體何うかして居るよ。」

「私、奥さんに濟まないわ。」

と弱々と顔に寄せた、暗にも白い頬に、瞳の露の

散つて見えたは、再び光りものがしたのである。

樹は森然と漆を流す。

「あら、電ぢやないか知ら。」

「否、電車だ。」

「が、雲は森を襲つて来た——實際、電光であ

る。

お妻の髪が颯と黒い、鼈甲がきらりとした。唯裳
が消えて鷺草の白い事。

「呼んで来い！ 遅い。」
麥酒を隙なく煽呻りつけて、白天狗の眼は先刻から据つて居る。

御注進と云ふ見得の、島田が一人急いで来て、
「餘り汗に成りましたので、一寸お風呂を頂いて居りますから。」

これは、お縫と打合せて、お妻の歸る間を繋いだのである。

「面白い。」

男爵は胸を一つ打つて、大手を擴げた。

「彼女。悪くかたづけて、不意に足がらで蹴倒しても、咽喉から下は些とでも膚を見せん。」

待たした罰だ。素裸體で来いと申せ。俺も裸體だ、其處で踊る。あつはツはツはツ。」

一屈ぎ屈いで、少時麥酒にしたと思ふと、やがて、揉立てる髯の尖が激しくひつづるが如くに動くと、びりりと天鵝絨のやうな濃い眉に稻妻を走らせて、

「遅い！」

「最う直きでございます。」と、座に年上なのが取做を言ふ。

「直ぐにと云うて裸體で来るかい
愚
圖々々面倒だ。
湯殿へ行く

で、ぬつくり立つ
行兼ねはしないのであるが、此の湯殿へは遣つても可かつた。客風呂の方には誰も入つて居なかつた、雖然、立廻らせて、然うでもない。次手に浴びるなどは迷惑で
實はお妻は少々頭痛がして臥りました、と言ふ。

「可し。」

「あれ、御前様。」

左右から留める間もなく、前を衝いて、どた／＼と駈出して、長廊下の途中を、前面から來懸つた、一人の稚兒鬚を、出會状に、むずと其の幼な肩を引拵む。見上げるばかり、形相の凄じさ。

「キヤア」

「お妻は何處だ。嘘を吐くと許さんぞ。」

「表のお茶の間——」
居たのが、今は、居るも、居ないも、聞く隙なんぞ有らばこそ。

で、波崎とお妻の居た、茶室の眞中へ突立つて、四方の隅をじろ／＼と視た。目が白光りに光つてどろんどろんとして居る。巴里の名優なにがしの眼に肖たりとあつて、御前得意の處だが、婦人の見物は喝采でない。血走るを超越して酒亂を白熱したのであるから——唯、見据ゑて、やがて金屏風の、はしけやし露の白玉したゝるいのを、じろりと睨んで瞳を据ゑる。

電が颯と射して、思ひも掛けぬ雷の轟。

「雷様。」

「あれ、鳴つて来た。」

時に白天狗の所爲を見よ。金太さんぢやあるまいし、繪から男女が轉がり出さうに、屏風をぐら／＼と揺つて居たが、ドンと突いて、ばたりと倒すと、立掛つた婦たちの、はつと袖褻の煽る時、獸が這つ

た形かたちに成なり、杯洗はいせんを引搦ひきつかんで、波崎なみざきが居あた座蒲團ざぶとんに
だふり打覆ぶちまけると齊ひとしく、立身たつみ上ありにぐわら／＼と、
皿鉢さらばちぐるみ膳ぜんを足蹴あしげに蹴返けかへした。

續つづけざまに雷らいが響ひびく。

白天狗しらてんぐは胴どうを揉もんで、洋服やうふくの上う衣はぎを脱ぬぐ、と一振ふり々ふ
つて、天井てんじやうへ投着なげつけたのが、一煽あふり鳶とびの形かたちに擴ひろがつ
て、ふら／＼と落おちる途端とたんに電いなびかりが颯さつと流ながれて、男爵だんしやく
の手に鋭すどい刃物はものが閃然きらりと光ひかつた

「お妻つまを出だせ。」

と逆手さかてに取とつたは、伊太利道中いたりだうちう、コルシカ島見たうけん
聞ぶんの標徴シンボルたる、御前ごぜんが所謂いはゆる短劍スチリットである。

「お妻つまを出だせ。」

づか／＼と茶室ちやしつを出でると、欄干らんかんに立掛たちかつたのは一
散さんに駈下かけおりるし、附添つきそつたのは左右さいうに開ひらく、怯おびえて
戸惑とまどひをした稚兒おちこ鬚ひとは一人ひとり、廣間ひろまを切きつて縁えんに、辻すべつ
た。

男爵は、高い天井を蒼白く凝視ながら、白襯衣ばかりの反身に成つて、疊廊下を大跨に歩行廻る。

此の折から、波崎とお妻は、公園の森を大廻りに繞つて、一つ越して、翠明樓の廣庭の、境界の樹立に續いた、晝も薄暗い生垣の處へ來たのである。

送るなら送るで可し、送らないなら送らない。まよ
よ！ 遁げるなら、思切つて遁げさうなものを、身
も心も戀の闇にさまよひつゝ、送るのを送られて、
送らるゝのを送ると稱へて、未練な袖を合せて來た。

場所もあらうに、樓の横庭の此の茂の下 の垣根
まはりは、人の通る路はなし、又通るが道でないの
である。が、此處に内證の通路に、一本、竹の柱を
離して、生垣の杉を開いた忍戸が一處 勿
體ない事ながら、然る筋の踊子、歌方などは、此を
觀音様の抜道と言ふ 横手の小山に祠があ
る、また辨天様の裏口と云ふ 坂下の池に
御堂がある。

「がさ／＼がさ／＼
「分つたか。」
「暗くつてねえ。―― おゝ痛い
と、お妻は忍び聲。」

「何うした。」

「茨があつて。」

と手探りで云ふ。がさ／＼がさ／＼。

「晝間も見て然う思ふがね、大して高くはないんだから、背後から抱上げれば、向うへ、へ越せさうなものだかな。」

「人、茨で倒に引掛つたら何うして

焦

つたい、確に此處ン處なんだけれど

透すと遙に御殿造りが、港の家のやうである。庭が一面、海の月の如く輝いた、と思ふと電が羅にかゝつて、お妻の扱帯の緋縮緬が、薄紫に衝と消えた。

「分りました、あ、酷い蜘蛛の巣

「大丈夫か、」と言ふ、波崎の聲が、何故か沈んで震へて居る。

「目を瞑つても大丈夫よ、近頃馴れて居りますか

ら

と低聲で花やかに言ひながら、枝の切目を向うへ
押す、電また來たり、姿が垣に挟つたが、空蝉のあ
はれが見えて、露に濡れて尚は果敢い。

蜘蛛の圍も見えるやう。

「随分掛けたね　お縫さん得意の處。

我が背子が來べき宵なり、　此が

明日の晩だと頼もしいわね

「それぢや、波さん。」

言ふ間も無かつた、途端の雷鳴。お妻も不意に驚
いた、が、此は然して恐れたのでない。が、一度遠
くにも此の天空の鐘が響く、と聊か外聞も憚から
ぬくらゐ、立處に、男は生死の境に氣を打つのを、
婦は豫て知つて居た。唯見ると便なや、頼む樹立も
有るものを、こぼれ萩の丈のびて、便りない葉の中
に、ひよろりと倒されさうに成つて、兩手で犇と面
を壓へた。黒雲封を切つたれば、呼吸をも吐かせず、
目を射る電光。お妻が我が手で疊んで持し
た、絹の羽織を懷中にした胸に、大きく動悸が打つ

やうで、紺^{こん}緋^{がすり}の帷子^{かたびら}に茶^{ちや}献^{けん}上^{ちやう}の帯^{おび}をした、着^き流^{なが}しの夜露^{よつゆ}にしつとり濡^ぬれたのが、ものあはれに、便^{たより}なさうで、いぢらしく、えゝ、焦^{じれ}つたい確^{しつかり}乎と抱^だいて遣^やりたい。

お妻^{つま}は一步^{ひとあし}衝^つと返^{かへ}した。

「大丈夫^{だいぢやうぶ}よ。」

「大丈夫^{だいぢやうぶ}よ、大丈夫^{だいぢやうぶ}よ。」

「あゝ。」

「確^{しつかり}りなさいよ。」と云^いふうち、續^{つゞ}けさまに轟^{とんろ}いて、次第^{しだい}に近い^{ちか}、はたゝ神^{がみ}。

「貴^{あなた}方^{あなた}、貴^{あなた}方^{あなた}。」

「あゝ。」

とばかりが、天^{てん}にも地^ちにも我^{わが}身^み一人^{ひとり}を力^{ちから}のやう、五^{ちが}ツ違^{ちが}ひの上^{うへ}ながら、弟^{おとうと}のやうな可^か愛^{あい}さに其^そのまゝ帯^{おび}を解^といてなりと、揺^ゆぐ玉^{たま}の緒^を、引^ひ占^しめたさ

肩に掛けた手に手を取つて、

「行きますせう、さあ、私の部屋へ。」

「何。」と此の際にも、男はさすがに驚いた。

傳へ聞く昔千代田の城の大奥よりも掟して、樓の唄方、踊子の部屋々々は、二階の欄干も雲の棧、霧の中より秘密なのであつたから。

「近所に何處もありません。」

早く蚊帳

を釣りませう。」

「差支なからうか。」

「有つたつて構はない。」

「それぢや、」

「あれ、雨が降つて来た。」

雷の音は、風より迅く雨を投げて、痛いやうに木の葉が散つた。

「否、否、大丈夫。観音様の道だわねえ。」

十一・その1

「お妻を出せ」
白天狗は碧目玉の其の形相で、帳場の前へ那翁だ
ちに突立つた。風采も亦似たり。

「出さんか。」
其の眼鏡を掛けた、色白な京都出の老女、當樓の
會計、兼ねたり監督は、頤を二三つぶる／＼と遣つ
て、大いに口吃する體であつたが、

「御前様。」
唯、睨む。
「濟まん事にござりますが、お妻は急に、宿許か
ら、親が急病や申して呼びに参りましたに就きまし
て」

「黙れ！」
大喝一聲、ために、横合から口を出さうとした算
用方の、老人の、三太夫めいて、此の温氣にセルの
袴穿いたのまで黙らされた。

「許すものか。」

と短劍、電に一閃するや、雷鳴とよもに、襖を一ケ處グサと突刺し、返す手を揮つて、一暴れ入口の葎戸を袈裟掛にスカリと切つた。セルの袴は膝が抜けて、べと／＼と逃腰に流れたが、監督の眼鏡は光つた。――此の襖もはりかへてト葎戸も八枚分來年は新規だ、次手に疊も入交へよう　――

御前は此あるかな、千里獨行。八十二斤の青龍刀で五關を破つて通る勢。臺所の料理場へ踏込んで、洗方の男どもと、下げた膳部に拭巾を掛ける仲働きの女中を眼下に見ながら、突當をドンと曲つて、南無三、湯殿の戸を開けた。

お末と稱へる房州仕入れの下働きが、長湯の湯氣からぼつと出て、豚のうだつた赤膚に緋の唐縮緬、上湯の姿見に向むきで、べた／＼と塗る處。また鳴神ともるともに、白天狗が、べたりと肩を引搦むと、アツと叫んで、桑原稱へたのが風説に残る。

カツと唾を吐掛けて、きよろり、と天井に眼を剥

きつゝ、短劍逆手に大跨で取つて返すと、帳場も引いて、玄關に誰も居らぬ。

唯電光の漲るばかり。控の室の壁際に、千代紙を切抜いた姉様のやうに、疊に附着き、稚兒鬚が對に突伏して居た。――ちらり、と見えて、戸棚へ消えたは、何の影？ 其が後ずさり、いま、襖を八分引いた處を、飛蒐つて、白天狗が、足を突込んで、こじり開けた。

「お角か。」

「へい、」と、二人居る總取締の一人が、わなゝいた聲を出す。

「お妻を何處へ遣つた。」

「存、存じません。」

「決して出さな。其のかはり貴様も出るな。一步なりとも戸棚を出るな！」

「はい。」

「馬鹿！ あツはツはツはツ。」

唐突に呵々と高笑。雷の留間の天井、梁を、黼が駈けるばかりなり。唯其の大聲に、我ながら調子づいたか、身震ひして短剣を閃かすと、バシリと凄い音を立てた。途端に一室、三十五疊が暗く成る。

「ひい。」 「あれえ。」 と彼方此方の婦の聲は、驚いたに違ひない。雷ではない、微塵に、粉に、電燈を破つて落したのである。

「お妻を出せ。」

其の暗がりを出た形は、白襯衣の胸に血が刎ねた、我手で傷けた硝子の缺に、拳も垂々と血を染めて、赤い顔して、ニヤ／＼ニヤ／＼と笑ひながら、

「お妻を出せ。」

お妻は蚊帳に肱白く、兩の腕を頸に反らして、雨に亂れた鬢のおくれ毛を搔いて居た。濡れて透るまですはなかつたが、羅の褌のしとつた重さに、片褌をするり反した、はツかけの水色が、裾の紅麻に色を染めて、ほんのりと媚かしく、蹴出し模様的女郎花も、あらはに、蚊帳の萌黄に咲くのを、電燈の細い影。螢が照らす面影である。

お峰と云ふ　――　此の婦は、後に醫學士の細君
に成つた、　――　矢張り此の部屋に寝る十八に成
る踊子が、今入つて来て此を見た。

「御酒を飲んで元氣をお着けなさいましな。姉さ
ん、此處へ持つて来てよ。」と、袖に隠したのを、
密と出す　凡そ天が下に役雑ものゝ徳利も、
恚う美しいのが扱ふと、首は長いが雛である　――

ト　唯、お妻が、水晶のやうな前歯で一寸啣へて居た、
白檀の櫛を膝に落して、

「あゝ、何うして持つて來られたえ。」

「お帳場から盗んで來た。」

「一寸、せめて誤魔化したと言ふものよ。」

「何だつて構やしない、事爰に及んでは、

と高慢な事を云つて、蚊帳越ながら、

「波さん、兄さん、お酌をして上げますよ。」

「口が利けるもんですか。」

「弱蟲だねえ。」

「お峰さん、お縫さんは未だかねえ。」

「先刻、姉さんを探すつて、一人で駆

出して行つたんですがね。――可いわ、お取締の

いひつけだから、姉さん、

「だからさ。」

「此の雨ぢや歸られないわ、何處かに雨止みをして居るでせう。大丈夫、雷様は可恐がら

ないから。」

（――お縫ひの雨宿りした處を、一寸此處に言つて置かう、恰もこの時、あの、垣根の抜道に近い、小山の観音堂に居たのである。――）

お妻は、しどけない藤色絞りの帯揚の、ずり下る端を壓へて、

「でも、氣の毒だわねえ。――困つた

と、うつとりしたやうに仰向く、と眩いばかり

り電。

「私、見て来るわ

様子をね

あの方も。」

「あゝ、何うぞね。そして、鏡に袱紗を掛けてつて頂戴、可恐がるから。」

お縫の分と、此の二人、部屋の三人の姿見が花野を亂した衣桁を透し、壁の三味線の絃を蒼く掠めて、隙間を切つて射込む光に、颯と、三面もの凄く、沖を漂ふ怪魚に似て、雨は唯波を覆す。

「はつ、」

と呼吸して、

「大丈夫よ私が一

居ます。」

蒼く霞んで、蚊帳の目を消えると、頭からすつぱり搔卷で目も鼻も手足も見えぬ、人間か杭か分らない、海鼠の凍えたやうなのに、胸をふせて、がつくり、と圓鬚を俯向けた。

「開ける。――開けるい。」

お峰が、長局と稱へる部屋の二階から下りて、母屋へ續く屋根廊下を急足で、お鈴の口、御錠口、と俗に稱へる。――俗には可笑い、洒落に

否や、女たちは眞面目に言ふ。其の板戸の處。唯ばたノノと駈込んで來た同じ年ぐらゐな踊子がある。

「あら、お楨さん。」

――可哀相に、お楨と云ふのは、此の翌年十丸の厄で果敢くなつた。――

「大變よ、杉丸様が、此處へ。」とお楨が呼吸をする。

「えゝ。」

白天狗は、猛然として、鼻で嗅ぎノノ長局を襲つて來たのである。

二人がガチリと戸を鎖して、四つの袖垣、隙もる吹降りにはら／＼戦いで、わな／＼き遮る。

「開ける、開ける。」

一息前に、激いのが一つ鳴つて、雷鳴は遠く成つたが、破れるばかりな板戸の音。

「蹴破るぞ。」

「誰だい、其處をお開けなさい。」

覺悟をした聲で、男爵の背後から言つたのは、總取締の一人で、此がお此と云ふ、五十餘の老女である。

開けると、遁げた――お禎は下座敷へ躲したが、知らせるつもりで男爵が躍上つた。お峰が階子を駈上ると、つけのぼりに男爵が躍上つた。上も下も、部屋々に氣勢を悟つて、パツパツと稻妻のやうに電燈を消した。早や打解けて寝たのもあり、按摩を取つて居るのもあつた。

お妻の部屋へ翻然と入る、とサソクにお峰が電燈

を捻ぢつて消さうとした。其の背を、男爵がドンと突く。窓際に倒れたのを見向きもせず、電燈を背に、其の血だらけな白天狗は、立身で蚊帳の中をぢつと透かした。雨は止んだ。雲は一所吹晴れたらう。寂然とした時、ニタリニタリと、得も言はれない笑を唇に黒く浮べた。

釣りて
かたすみ
釣手を片隅！

はつと萌黄の波を浴び、お妻は姿を浮かしたが、膝も棲も漂ふ風情。投網に咲いた月見草、衣紋のみだれ紅裏は、乳に一刀浴びたやうな。蚊帳を拂ふ手わな／＼と、蒼白い顔を夢のやうに振上げて、
「御前様、御免遊ばせ。」と、なよ／＼として言つた。

「お妻。」

白天狗が呻つたよ！と齊しく、支膝で居た婦の棲の、しどけないのを立蹴に蹴つけた。

曲つて躲す身がのめる、と帯をばつたり、畳の上。

天狗大胡坐にニと座し、懷紙を引しやなぐつて、

滴る指の血をべた／＼と拭取りながら、短剣を握つた拳を弛めず。

「あ、」

刃の平で、お妻の肩をべたんと敲いて、

「何うした。うむ、何うしたい。」と又びたり、と敲く。

「は、は。」とばかり幽に言ふ。

「誰だ、最う一人寝て居る奴は。」

「お縫か。おい、誰だよ、おい。」

と、今度は短剣を雪なす頬に、お見舞申す。

お妻の顔は、其の剣より蒼ざめる。

「言はんか、言はんかい。返事をせんな。可し、黙つて居れ、吐すな。」

戦慄く婦の指の間へ、グサ／＼と畳を縫つて剣を刺しつゝ、

「殺しちやア面倒だらう。が、片耳殺ぐか、口を

裂くか、指の二三本バラ／＼に落いても、此の方の
身にかゝはらず弗を積んで濟ます事ぐらゐ心得て居
るんだ。不具に成らんうち吐さんかい、吐せ！口が
利けんか、利けるやうにして遣らう。」

お峰が其處に差置いた、銚子にうつむけた猪口を、
バリ／＼劍の平で叩き砕くと、倒に口へふくんで、が
ぷりとやつて、■を立てゝ、お妻の顔に吐掛けた。

「御前様、御免遊ばせ。」はつと聲を呑んで、
其の雫より涙繁く、懷紙を取つて當つる處を、襟を
摘んで、ぐいと曳く。

するりと片肌、衣紋が、辻つて、玉子を剥いた白
い肩、唯見た肌襦袢の襟を掛けて、圓鬚の上から倒
に銚子を浴びせた。

然らぬだに心地死したる雷鳴に、地獄の一丁目ぐ
らゐまでは彷徨つた男の耳に、其のだくだくと言ふ
音が、婦が膚を裂かるゝ、血が流るゝより激しく響
く。

波崎はすつくと出た！ 雨を透した帷子ばかりは、
網を躍つた鱗である。

腕まくりして、むずと居直り、

「お妻！」

「何だ。」と男爵が詰寄つた。

「俺は波崎俊吉だ。」

「はん、色稼の手品師かい。」

「黙れ！ 男同士で應對するほどのことぢやない。

虐げられたのは此の婦だ。婦から挨拶させよう。

「お妻。」

と確と手を取つて、

「確乎しな。何故、何故こんな事をさ

れて黙つて居る。男爵が何だ、華族が何だ、横面を

撲いていて遣れ、火入の灰を打撒けないかい。――

御前様 何が御前だ。氣が弱いたつて江

戸兒ぢやないか。お妻、お前は其の野郎のお妾か、

圍はれものか。おい、お部屋かよ！ 如何に事勿れ、

波立なみたてまい考かんがへだつて、男をとこの居ある前まへで、俺おれの前まへで、御前ごぜん様さま御免遊ごめんぎょうぬるくつて、齒はかゆ痒ゆくつて、黙だまつて聞きいちや居あられない。世間せけんにや華族くわぞくだらうが、此樓このうちにや殿様とのさまだらうが、よしんば、お前まへにや御前ごぜんだらうが、俺おれの目めにや芋蟲いもむしだ 騒さわぐな、待まて。」

象ぞうのやうな尻しりを押立おしたて、逆手さかてに取とつたを尻目しりめに掛かけて、

「内うちが迷惑めいわくする。戸外おもてへ出でてから突ついて来こい！ さつさと此方こつちは遁にげるから。可愛かはいい女房にょぼうも待まつてるぜ、は、は、は。」

と神經しんけい的な笑わらを洩もらして、

「第一だい、俺おれが相手あひてに成なるんぢやない。婦をんなに對手あひてをさせて遣やるんだ。お妻つまさん、平手ひらてで一ツ這面しやつらをお見み舞申ひまをしな、毒どくづきなよ、ふやれ、え、しつ腰こしのな、い、これ。」

手てを揺ゆつても、打うつやうに背せをさすつても、唯弱たゞよわ々と成なつた身みは、見みる間まに骨ほねも透すくばかり、羅しよものよりも

萎なえて行く。

「ちよツ。惜くやしいな、蹂躪ふみにじられて黙だまつて居ゐるか、お前まへが、野郎やらうの面つらを撲なぐつて、其その返報へんぱうに刃やいばが來きたら、其その時ときこそ、楯たてに成なつて、俺おれが刺さされて遣やる、斬きられて遣やる。雷か、雷かみなりの激ばげしい時とき、身からだを蔽おほひに庇かばつてくれた嬉うれしさにな、女をんなの意氣地いきぢを立てさすためにや、しがない、働はたらきのない、こんな俺おれでも、指ゆび一本ほん、爪つめ一つ、何處どこに不足ふそくのない男をとこの、身からだ體たを投なげに出だして遣やらうと言いふんだ。遣やれ、遣やれ、一番ばん立直たちなほれ。」

「お縫ぬひさんは、お縫ぬひさんは？」と、お妻つまが息いきの下したで呼よんだ。

「お縫ぬひさんが何どうしたんだ　　ー　　え、

御前ごぜん様さま、御免遊ごめんあそばせ　　ー　　俺おれの前まへで、俺おれの前まへで、

俺おれの婦をんなが、俺おれの婦をんなが、確乎しつかりしないか　　おい、

お妻つま！　　」

「一寸。」

痰にさびた聲を掛けて、黄色く痩せた小造りな身体に、突張らした帷子を、袖も裾もぶは／＼と廣く着た根下りの銀杏返で、衣紋をつくつた取締。こゝに草分三十餘年、小金を溜めて高利を貸す腕に覺えのある老女が、悪く落着いて又ツと出た。

「波崎さん。」

「やあ、お此さんか。」

「貴方は不思議な處にお立入りなすつてゞございますのね。」

「濟みません。實に此については申譯がない。氣障にも可厭味にも聞えようが、大嫌な雷鳴で、蚊、蚊帳でないと一分間も凌げないので。」

「樓は御座敷でございます。お客様は誰方でもお座敷でございますね。へい、此處は貴方、樓がはじまりましたから、以來、按摩でも男は入れません掟でございますね。まことに、恚やうな事に成り

ましては、私わたくしはじめ一大事だいじなのでございます。お解わかりに成なりましてせうか。可ようございますかね。

處ところで、それはそれ、別に括くくりを着つけて頂いたくことにいたしますが、唯たゞ今いま、あれから承つげはりますと、お妻つまは、俺おれの、俺おれの何なんとかだから、御前ごぜん様に楯たてをつけとおつしやいましてございますね。」

「うむ、然さうだ。」　としゃくつて言いつた男爵だんしゃくの頤あごも咽喉のども白しろかつた。

「ねえ、もし波崎なみざきさん。」
波崎なみざきは少すくなからず意沮いはひんだのである。

「それは、然しかし」

「手前てまへどもでは、で、ございますね。此このお妻つまは、大金たいきんを出だして抱かへて置おきます、奉公ほうこう人にんだと存ぞんじて居をりますのでございますが、如何いかなものでございますかね。」

「それは、然しかし相違さうみありません。」

「然うだ、樓にも奉公人、俺にも奉公人同然な女だ。うむ、お妻。」

と白天狗は片手を握つて、ぐいと又引寄せた。お妻は骨が裂けたであらう。

忍んで絶る女の指より、男の袖がわなゝいて、

「それは、然し 然し！ たとひ奉公人

と雖も、虐げ、辱め、苦しめる

「ですが。それでございましたら、主人の方から言ふべきことは言ひますでございます。

又、御酒興の上で、少々無理をなすつたり、悪戯をなさいますくらゐは、其處が貴方、客商賣、奉公人の身の悲しさではございますまいでせうかね。」

「否、お妻には親があります。奉公人にしろ、何にしる、苟も人の子を虐げる

「はい、親がごいますです。弟、妹、大勢ごいます。お妻は、それを養はねば成りません。此の身體は手前ども奉公人でございます。で、御前様が御情で、此の、其の親、其の弟妹だちを御扶持遊ば

して在らつしやるのでございます。」

「此方、向けい。」

野分に臥した女郎花を、あはれ捻折るが如く、お妻の肩を取つて、居直らせて、どたりと波崎の膝の前に髯を泳がせ、大象の脚袋を、お妻の諸膝にどしんと乗せて、白天狗は眞仰向けに寝轉んだ。

波崎は蒼ざめた。

「可し、奉公人とも言へ、親の子とも言へ、人間同士だ。同人類として俺は見て居られない。」

「人間とおつしやいますが、波崎さん。貴方は他所の垣根を破つて犬潜を遊ばしたではございませんか。」

お峰とお楨が、はツと寄つて、波崎の左右に縋つた。

「何と言ふことをなさいますのでございます。波崎さん。貴方、まだ、そんな事ぐらゐぢやありませんよ。濟まないことがございます。貴方

がお潜りなすつた垣の穴から、盗人が入りましてね、
樓の監督部屋の、金目のものは、すつかり持つて行
かれましてございます、はい。大層な金高なのでご
ざいますのです。飛でもない事で、貴方、唯今、大
騒ぎなのでございますがね。」

「おい、おい　　おい、お妻、おい。密夫
などは尚だ色気がある。盗賊は不可んな、家尻切は。
如何に親兄弟のためだからと言つて、竊盗の手曳は
するな、金子なら幾らでも俺が遣る。うむ、遣る
よ。」

「御前様、」

波崎が屹と見ると、

「貴方、餘り　　と、お妻は身を震は
した。」

お峰が波崎の背を搔擦る。

「お峰さん。」

「はアい。」

「お縫さんは歸らないか。」

。よく

ノ、であつたらう。

「まだよ、貴方、波さん、何。」と、お槓も優

しく顔を覗く。

「薬はないか。」

「え、胸がお苦しいの？」

「お腹が痛い、寶丹なら持つて居ます。何時も兄さんの合薬の六神丸でなくつちや不可い？ お縫さんが持つて居る。」

とお槓が縋るやうに言ふ。

お妻はハツと音に立てる。波崎は落涙した。

「うむ、違ふ、毒が欲しい、飲ましてくれ。剃刀を

貸せ、刃物が欲しい。俺は死にたい、こゝで死にたい。」

「迷惑でございます、はい。」

「お此さん。」

波崎は手を支いた。

「意地も我慢も忘れませんでした。根性亂れた。お此さん、更めて挨拶します。」

羽織も忘れて、見すばらしく、裾もよれ／＼に成つて立つ。誰も泣くまい
女房が、見たら泣くであらう。

「はん、垣の穴を潜つて逃げる、犬め。」
白天狗がむくりと起きて、お妻の膝にしなだれかゝつた。

唯、お妻は思はず、立たうとするのを挫がれた。

「道が悪うござんす、波崎さん、貴方
とばかり、顔を上げたが、目は見えぬ、鬢もしたゝる涙である。」

「杉丸男爵。」

「何だ。」

「人間に成つて、又會はうぜ。」

十四

「一人で澤山だ。」

お此の吐出して云ふのを聞棄てに、お峰に手を曳かれるばかり、附添はれて、ひよる／＼と廊下を通る波崎は、戸惑ひした引過で、壁際を玄關へ。

「あら、兄さん。」

頭に、あゝ遅かつた、お縫が歸つた。

唯、言を交す間もなしに、突如、跣足で通魔の如く門を消えた。

「兄さんぢやないの？ まあ！ 何うしたの。」

「大變よ、お縫さん。」

部屋では老女が、カチリと灰吹で煙管を叩いて、
「お妻さん、一體、何う云ふ事に成るんでせう

ね。」

お妻は胸を抱緊めた。

「死んで申譯をいたします。」

「迷惑です。」

と、づつきり言ふ。

「え〜。」

「まあ、可い、まあ可い。」

「御前様さへ、何事もおのみ込み下さいましたら、
で、ごさいますけれども。第一盗まれました損害か
らしてね、お妻さん、いづれ、表向きに成る日には、
波崎さんの犬潜りの一件も　ー　ですね。」

「お此さん、生命に掛けます、何うぞ、何うぞ、

そればかりは。」

「然うは行きませんね、大變な事なんだから

」

「大變だと言つていくらがものだ。お妻の返答次
第で、俺が償うて遣る。損がなければ、表向きも届
もなからう、何うだ？」

「それは最う貴方。」

と煙を呑込み、ふつと吹いて、

「お妻さん、何うしておくんないます。」

「

一言、おつしやい。（御前様何事も、）と。

第一、今までの事でも然うです——冥利を知ら

ないでは不可ません。罰が當つたのです、よ。さあ、

ね、（御前様、何事も）と、ねえ、（御前様、

何事も。）とね。」

お妻はしめ木に絞らるゝ、汗は冷い袖を透して、
白天狗は尚ほ、どろりと成る。

「ね、御前様何事も
それとも打壊して

了ひますか。」

「御前様。」

と、兩袖で、年紀二十七一の圓鬘を背けて、娘の
如く面を蔽つた。

「可し、其のかはり
屹度だぞ。——

お此、此の蚊帳は用ゐられんかい。」

「此處は、御前、男の按摩も法度なんでございます

す。」

「それぢや、直ぐに借りて行く。」

「表向きでは成りません。が、錠をかつて置きま

しても。ね、御前、」

「あゝ、盗出すか。犬潜り。面白。あツはツはツ

はツ。」

げら／＼笑で、

「巫山戯た眞似をしやがった。此奴へも面當に、

其の垣根から連出さう。」

唯、目を瞑つて忽ち相好を崩して又高笑した。

「あツはツはツ、――負つて行く――」

此奴も行りをつたに相違ないのだ

」

奥の四疊半の雨戸を開けて、袖垣の萩に露ある時、
二十日月に蜘蛛雲が散つた。
縁側に腰を掛

けて、

「自動車は、裏の坂へ廻して置け。

業平は靴だ、靴だ。」と喚く。

背後うしろに悄乎しんぼり、扱帶しごきをしめつゝお妻つまが立つた

性急せいきふな白天狗しろてんくは着換きかへる隙ひまも許ゆるさなかつた。

「汝きみは負おされ、足袋たびで可いい、自動車じどうしゃで横抱よこだきよ

」

「姉ねえさん。」

お縫ぬいが衝つと寄よつた。お妻つまは黙だまつて、目めで別わかれを告つげたのである。

「お縫ぬいの奴やつ、面當つらあてに汝きさまに見みせたい。送おくつて來こい。

お峰みねと、お槓まさは案内あんないせい。これ、お縫ぬい。」

「眞平まつびら御免ごめん。」 ツンとしてお縫ぬいが云いつた。

お妻つまは背せなへ、鬼おにに取とらるゝ心地こゝちして、

「見送みおくつて、頂戴ちやうだい、お縫ぬいさん。」

「えゝ。」

「貴女あなたには送おくられたいの、おとむらひですもの、あツ。」 と息いきして、腰こしをすくめた。

庭下駄にはげが雲くもに浮ういて、潦にはたつみを密そつと行ゆく。

「頬邊を貸せ。」

白天狗の豊肥した白い頬を捻向いた、其の笑ふ時
口が黒い。

あれ夜鴉が、自動車の笛の絶叫は迎を急ぐ火の車、
せめては蜘蛛の巣なりとも、前途の垣を遮れかし。

「頬邊を貸せと云ふに！」

振背けたる鬢が亂れて、髻が、弗と切れ、酒と涙
の濡髪は、月の光に蒼ずんで、輝いて颯と流れた。

「貸さんが汝。」

あゝ、黒髪は心よりも弱く、絲よりも柔らかに、
男爵の口に手繰られた。月の草には蟲の聲、露は散
敷く涙である。

錢なしの見せしめに、波崎に見せて顔が見度い

――

「堪らない。」

お縫^{ぬひ}が褌^{つま}を取^とつて駈^{かけ}出^だした。

【完】